

地域史で学ぶ歴史教育
ー近世・近代の歴史教育を事例としてー

竹本 敬市

姫路大学教育学部紀要

第10号

平成29年12月31日発行

地域史で学ぶ歴史教育

ー近世・近代の歴史教育を事例としてー

竹本 敬市

要旨

本稿は、歴史教育において地域史の具体的な事例を教材として取り入れ、それによって歴史全体の構造を学ぶと同時に社会科の本来の狙いとする「平和で民主的な国家社会をつくっていくための必要な基礎知識を養うこと」を狙っての論考である。具体的に近世の村方騒動での村帳簿の公開を求める事例を取り上げ、今日の監査請求にあたるのが当時行われていたことをしめしながら、封建制下での民主化の発展過程を歴史教育の中でとり上げようとするものである。また同様に、近代での自由民権運動にあたる地域の結社設立の事例を取り上げ、民主化の発展過程を歴史教育で取り上げ、平和で民主的な国家社会をつくるための教育につなげようとするものである。さらに、民主化の筋道や民意の反映の発展のありかたを展望しようとするものである。

キーワード：地域史、村方騒動、徽章、民主化、歴史教育

はじめに

歴史教育の現状をみると、危機的な状況にあるといわれる¹⁾。社会科離れが進行している。また、総合的な学習の時間の設置で、社会科の分野が浸食されている。また、今日的な政治状況から、政治的に中立でなければならないという法的な制約から、偏向を避ける意味で無難な歴史教育になっているという²⁾。平和と民主主義を主張すると偏向教育であるかのごとく批判されたり、偏っていると攻撃されるようなところもある³⁾。また、そんな中で歴史学と歴史教育の再生を目指す方向もある⁴⁾。世の中の動きとしては、雇用不安、契約社員問題がある。現場においても、臨時的任用の教員が目立つようになっている。いじめの問題や部落差別の問題など人権侵害が深刻化している。教科書問題を見ても、思想統制、思想教育の一面がかいま見える。教育委員会も内容よりは教育技術論に重点を置いた指導になっている傾向にある。にもかかわらず指導力の低下が指摘されている。今までの研究の成果が生かされていない。教科書中心になっていて教科書以外の内容が入らなくなっている。学校現場に余裕がなく地域教材を取り入れる暇がない。そのためか、平和が脅かされていると主張する人もいる。社会の格差、貧困、非正規雇用、学力競争が激しくなっていたり、いじめ、落ちこぼれ、自己責任だと弱者が見放されるところもある。民主主義の危機的状況といえる。

社会科教育の求められている現代的な課題（＝主権者としての教育、人権教育、市民の権利）を自覚して、その権利を行使できる市民に育てていく教育が求められている。自らを歴史をつくる主体に変えていくということである。本稿では、地域史の具体的な事例を教材として取り入れ地域史で学ぶ歴史教育⁵⁾についてまとめている。

1 問題の視点

教育基本法第一条に「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」とある。小学校の学習指導要領の社会の目標にも「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化

する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次の通り育成すること」とある。中学校も同様である。高等学校では「国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質を養う」とある。勿論歴史教育においてはどの校種も「平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を」育成するために行われなければならない。ところで、今日的な教育改革が「民主主義教育の解体」⁶⁾というように言っている人もいる。そうすると憂慮すべき事態である。現時点で歴史教育、歴史研究の視点ははっきりとさせておかなければならない。

歴史教育、歴史研究での視点は、「平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を」育成することであると同時に、民主主義の道筋を明らかにしていくということである。ここでは地域史に焦点をあてた視点から民主主義の筋道をあきらかにするということである。歴史研究の視点では、古く1950年代に、戦後の民主化の中で、「封建遺制の克服」を課題意識として研究された。具体的には、村の封建制の史的解明であった。そうしたことを意識しながら民主主義を深めることを念頭においている。

今日的な視点としては、民主性、平和、命、人権、主体性、弱者への配慮、対話、寛容といった言葉がキーワードとなる。選挙権が18歳からになり主権者教育が必要視されている。そうしたことも加味しての視点である。今日的には民主的な世の中とはいいながらもまだ十分なものとはいえないところがあるといわれたりしている。「平和で民主的な国家及び社会」といった場合、

○対話、寛容、命を大切にする社会であるということ。話し合いには時間がかかるということを知っている社会であるということ。
○異なるものに寛容である社会であるということ。
○常に良いものにしていくところがある社会であるということ。

○弱者あるいは少数者を大事にする社会であるということ。多数決で直ぐに決めてしまう社会ではないということ。

○平和を求めるところが根本にある社会であるということ。

○命の大切さを最優先にする社会であるということ。

まだはかに民主主義を発展させる要素がある⁷⁾。こうしたことを

踏まえて、より高度な民主主義を考え展望していくということである。今日的な歴史教育、歴史研究での視点は、民主的な要素を探り出して主体的にかかわっていくということである。

地域史で学ぶ視点は、地域史に焦点を当てた歴史学習である。「地域史の実証的研究の中から通史を逆照射し通史の内容をダイナミックにしていかなければならない」「地域の主体性こそが通史に影響を与え、国家を変容させ始める」⁸⁾という視点である。

2 学習指導要領にみる地域史学習

学習指導要領にある小学校の第六学年の目標は、「国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について興味・関心と理解を深めるようにするとともに、我が国の歴史や伝統を大切に、国を愛する心情を育てるようにする」⁹⁾である。内容では、「我が国の歴史上の主な事象について、人物の動きや代表的な文化遺産を中心に遺跡や文化財、資料などを活用して調べ、歴史を学ぶ意味を考えるようにするとともに、自分たちの生活の歴史的背景、我が国の歴史や先人の働きについて理解と関心を深めるようにする」となっている。そして、指導にあたっては、「博物館や郷土資料館等の施設の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を取り入れるようにすること」とある。また、「地域の博物館や郷土資料館などの学芸員から話を聞くことは、歴史的事象を具体的に理解する上で有効な学習である」とされている。そして、「地図や地球儀、年表などの各種の基礎的資料を効果的に活用」するとは、第6学年においては、「資料から必要な情報を読みとる」「資料に著されている事柄の全体的な傾向をとらえる」「複数の資料を関連付けて読み取る」「資料の特徴に応じて読み取る」「必要な資料を収集・選択したり吟味したりする」「資料を整理したり再構成したりする」と、高等学校の学習指導要領にある資料に対する見方・考え方がすでにここからスタートしている。小学校段階から資料の活用についてはレベルが高い。

こうした資料の収集・選択、資料の傾向の把握、整理、読み取り等々は地域の資料を対象にするのが最適である。地域史を歴史教育に生かすように言っていると解釈できる。地域史を歴史教育に生かさないという方が問題であるといえる。

中学校の学習指導要領の「目標」としては、「身近な地域の歴史や具体的事象の学習を通して、歴史に対する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる」となっている。また、「歴史のとらえ方」として、「身近な地域の歴史を調べる活動を通して、地域への関心を高め、地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解させるとともに、受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め、歴史の学び方を身に付けさせる」となっている。「内容の取扱い」では、「身近な地域の歴史上の人物を取り上げることに留意すること」や「日本人の生活や生活に根ざした文化については、政治の動き、社会の動き、各地域の地理的条件、身近な地域の歴史とも関連付けて指導したり、民俗学や考古学などの成果の活用や博物館、郷土資料館などの施設を見学・調査したりするなどして、具体的に学ぶことができるようにすること」、さらに、「地域の特性に応じた時代を取り上げるようにするとともに、人々の生活や生活に根ざした伝統や文化に着目した取扱いを工夫するこ

と。その際、博物館、郷土資料館などの施設の活用や地域の人々の協力も考慮すること」となっている。

高等学校では、日本史Aの「諸資料の活用について」で、「年表、地図その他の資料を一層活用させるとともに、地域の文化遺産、博物館や資料館の調査・見学などを取り入れるよう工夫すること」となっている。また、「国民生活や文化の学習について」では、「国民生活や文化の動向については、地域社会の様子などと関連付けるとともに、衣食住や風習・進行などの生活文化についても扱うようにすること」となっている。

日本史Bでは、「目標」で、「我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察させ、我が国の伝統と文化の特色についての認識を深めさせることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」とある。

具体的に、「原始古代の日本と東アジア」では、「歴史と資料」で、「遺跡や遺物、文書など様々な歴史資料の特性に着目し、資料に基づいて歴史が叙述されていることなど歴史を考察する基本的な方法を理解させ、歴史への関心を高めるとともに、文化財保護の重要性に気付かせる」とある。「内容の取扱い」では、「資料を活用して歴史を考察したりその結果を表現したりする技能を段階的にたかめていくこと。様々な資料の特性に着目させ複数の資料の活用を図って、資料に対する批判的な見方を養うとともに、因果関係を考察させたり解釈の多様性に気付かせたりすること」となっている。

「中世の日本と東アジア」でも同じように、「歴史の解釈」で、歴史資料を含む諸資料を活用して、歴史的事象の推移や変化、相互の因果関係を考察するなどの活動を通して、歴史の展開における諸事象の意味や意義を解釈させる」とある。「内容の取扱い」では、「資料を活用して歴史を考察したりその結果を表現したりする技能を段階的に高めていくこと。様々な資料の特性に着目させ複数の資料の活用を図って、資料に対する批判的な見方を養うとともに、因果関係を考察させたり解釈の多様性に気付かせたりすること」と、同じ内容になっている。「近世の日本と世界」でも、「内容の取扱い」で、「資料を活用して歴史を考察したりその結果を表現したりする技能を段階的に高めていくこと。様々な資料の特性に着目させ複数の資料の活用を図って資料に対する批判的な見方を養うとともに、因果関係を考察させたり解釈の多様性に気付かせたりすること」と中世と同内容になっている。現代についても同内容となっている。そして、「諸資料の活用について」では、日本史Aと同じように、「年表、地図その他の資料を一層活用させるとともに、地域の文化遺産、博物館や資料館の調査・見学などを取り入れるよう工夫すること」となっている。

「地域社会の歴史と文化の学習について」では、「地域社会の歴史と文化について扱うようにするとともに、祖先が地域社会の向上と文化の創造や発展に努力したことを具体的に理解させ、それらを尊重する態度を育てるようにすること」となっている。

次期学習指導要領改訂の方向性からは、「何を学ぶ」から「どのように学ぶ」「何ができるようになる」かへ。そして、アクティブラーニングの導入へと進んでいる。

高校の社会では、地理歴史に日本と世界の近現代史を中心に学ぶ「歴史総合」と、世界の文化や防災対策などを扱う「地理総合」を

新設し必須とすると示す。また、高校では選挙権年齢の引き下げを受け、公民に必修科目「公共」を新設し、政治参加や労働問題などを取り上げることとした。

次期学習指導要領の実施は小学校が2020（平成32）年、中学校が2021（平成33）年、高校が2022（平成34）年から実施となる予定とのことである。

学習指導要領において、小学校では「博物館や郷土資料館等の施設の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を取り入れる」となっている。中学校でも「身近な地域の歴史を調べる活動を通して、地域への関心を高め、地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解させる」とある。高等学校でも「地域社会の歴史と文化について扱うようにする」とある。地域史学習を取り上げるようになっていく。資料の活用についても、身近な史料の活用をいっている。「資料から必要な情報を読みとる」こと、「複数の資料の活用」さらには史料批判の能力を養うこともいっている。こうした資料活用については地域の資料が好材料である。地域史を取り入れることは学習指導要領のいうところからも有効であるということである。

しかし、現場の状況はどうかというと、教科書中心となっている。地域の資料が教材で取り上げられる場合は少ない。各地域では、県史から始まって市町村史が編纂されていて、史料も豊富にあるし地域史の内容も充実している。全体史に共通する地域の歴史がどの時代もある。にもかかわらず取り上げられていない。残念の限りである。

3 地域史学習の教育的意義

地域史を取り入れた歴史学習の意義は高いといわれている。「近年、国や地方公共団体、企業などによって、博物館やその他の施設の整備が進められている。これらの諸施設を積極的に活用して、社会科の見学や調査活動を行うことは、児童の意欲や学習効果を高める上で極めて重要なこと」¹⁰⁾とされている。子どもたちにとって身近な地域のことを取り上げることに意味がある。学習指導要領にも、具体的に、

- ・児童の意欲や学習効果を高める
 - ・児童の知的好奇心を高める
 - ・学習への動機づけや学習の深化を図ることができる
 - ・実物や本物に触れる感動を味わうことができる
 - ・施設を自ら進んで利用できるようになる
 - ・興味と関心を奮い起こすことができる
 - ・自分の生活とのかかわりで考えることができる
 - ・地域への愛着心の育成を培うことができる
- とある¹¹⁾。

貴重な地域資料が今日まで残ってきている意義を知ることでもある。残っていること自体の値打ちを知ることでもある。また、地域社会の一員としての自覚を高めることもできる。

身近な事柄から体系的なことがらを学ぶことができる。これらのことは、具体的な学び方を学ぶことができる。観察や調査、見学、資料の読解、取捨選択等々、結局、地域に関しては「興味と関心が高い」ということ、地域は身近にあるので調査・研究が「取り組みやすい」ということ、身近な事柄をすると概して「わかりやすい」

ということ、資質・能力面の意義として、観察能力、課題解決能力、分析能力、情報収集能力、コミュニケーション能力、感性、応用力、思考力、表現力、判断力、推理力、言語力、自己教育力、創造力、忍耐力などの力を養うことができるということである。

教材化するにあたっての留意点は、「何のために取り上げるのか」「それを取り上げることによって、児童・生徒にどのような力がつくのか」「どのような認識の土台作りになるのか」といった点に気を付けなければならない。地域資料の信憑性、信頼性を検討すること（論理的で理性的な思考と判断を心掛ける）ことは勿論である。また、「史料批判」も抜かしてはならない。本物を取り扱うことである¹²⁾。伝聞よりも直接の見聞とか関係者、写しよりも原本、出所の確認、正しく読み解いて、事実を明らかにし、解釈し評価する作業がいるということである。

4 地域学習の視点と地域学習のために活用可能な資料

（1）地域学習の視点

地域学習をするねらいや目的をはっきりさせておかないといけない。地域学習をするにあたっての視点として、小学校中学年では色々な角度から物事を見る。小学校高学年では何かの疑問や問題意識をもって考える。中学校では問題点や矛盾点に気が付き、因果関係や背景を考える。高等学校では因果関係を考察したり、解釈の多様性に気が付き、考えるといった意識を持つことが求められている。

例えば、伊丹市の取り組みでは、地域の文化や伝統を学習することは社会科における「人間理解」の重要な部分というようにとらえられていた。すなわち、「人間の生き方を学ぶ」ということととらえられていた。そして、地域の行事や祭りに参加するとか、地域の人々の話を聞くとか、伝統技術を見とるか、実際に作ってみるとかするようなことを取り入れながら、地域の文化遺産を調べ、先人の生き方や地域社会や地域文化を作ってきた人々の努力を理解する。そうして、郷土愛や人間を愛する心を育てるというように考えられていた。

地域学習を通して疑問や問題意識を持つ、その問題点や矛盾点に気付いてその関係や背景を考え、それによって人間理解、人間の生き方を学ぶ、そして最終的に郷土愛や人間愛の心を育てていくことを考えた視点である。地域史、歴史学習となると共通点もあるが、社会科の論理、歴史の論理が加わってくる。地域の歴史の視点については後で述べることにする。

（2）教材化のために活用可能な資料

地域には、遺跡、遺物、木簡、古墳、荘園、古文書、古記録、石造物、民俗資料などがある。遺跡などの調査報告書もある。それぞれの地域の歴史を自治体ごとにまとめた都道府県史、市町村史が編纂されている。全国ほとんどの地方公共団体に都道府県史、市町村史がある。編纂されたもの以外に編纂途中で蒐集された資料群もある。さらにまだ未調査の資料群も多くある。近現代では膨大な新聞資料もある。地方紙から広報誌、雑誌、など印刷物は各地域で政治経済科学、文化などあらゆる面で豊富に残っている。私的な日記や書簡もある。ふんだんに活用できる資料が地域にある。活用次第である。

更には、教育現場である身近な学校にも活用可能な資料群がある。各学校の校長室には必ず当該の市町村史が置かれている。また、学校ができてからの沿革史が残っている。さらに、卒業文集、卒業

アルバム、編纂された副教材、或いは学校の何周年記念かの記念誌や、その過程で集めた資料や古い貴重な写真が残っていたりする。校長室は資料の宝庫である。

資料は、身近いところから、まだ見つけれられていない未発掘の資料までふんだんにある。保管先も公的な機関から私的な個人所有のものまである。地域には活用可能な資料がいっぱいある。「宝の持ち腐れ」状態である。

- 教材化可能な歴史的資料内容を概観する。例えば、
- ・昔の地図・絵図に関して…村絵図、郡・国絵図、国土地理院の地図、航空写真を含めて、地形や土地利用の変化を歴史的にたどる
 - ・学校の歴史に関して…寺子屋、塾、学校沿革史（校長室に必ず保管されている）をもとに教育の歴史を振り返る
 - ・昔の卒業証書に関して、昔の教科書に関して…明治以降様々な教科書が使われてきた。教育制度を歴史的に振り返る
 - ・地域にあるお寺、神社に関して…宗教を歴史的にたどる、宗教活動もつかめる
 - ・石造物に関して…地域の残る石像物（五輪塔、顕彰碑等々）先人の働きや信仰がつかめる
 - ・昔の新聞に関して…新聞は明治の初めから存在、地方新聞もある政治情勢から地域の経済状況、文化面、三面記事もある、当時の世相がつかめる
 - ・昔の道具に関して…農具、機械、家財道具、食器等々。民俗資料館に道具類が保管されている。個人の家にも蔵や納屋に残っている。生活様式がつかめる
 - ・昔の食べ物に関して…普段の食べ物、儀式のときの食べ物、聞き取り調査も可能、試食も、歴史的に検証できる
 - ・昔の服装に関して…普段着、礼服、作製と試着
 - ・昔の家に関して…屋号調査、町並み調査、家の構造調査
 - ・方言に関して…聞き取り調査、交流圏
 - ・地域に残る古文書に関して…検地帳、年貢免状、村絵図、用水争論、山論、村掟、村落構造、村落支配の実態がわかる
 - ・年中行事に関して…正月行事、お盆行事、秋祭り、冠婚葬祭等々生活史が判明、生活実態の把握
 - ・地域の昔話に関して…聞き取り、古文書史料で残ることもある
 - ・地域の偉人に関して…それぞれの地域にはその地域出身の歴史上の人物がいる、どんな業績を残しているかを知ることができる
 - ・地域の遺跡、遺物に関して…住居址、土器、石器の発掘、発掘調査報告書が出版されている
 - ・地域の植生、土壌に関して…土地利用の様子を知ることができる
 - ・城に関して…山城、平城、石積み、縄張り、堀切、地域ごとに特色ある城が存在する。構造面でも時代によって違いが分かる
 - ・古墳に関して…古墳の形態、副葬品、遺物、古墳の位置、調査報告書もでている
 - ・荘園に関して…荘園史料がある、荘園領主、その変遷、荘園絵図の残っているところもある
 - ・村方騒動、百姓一揆に関して…各地での百姓一揆について報告されている。村方騒動は数が把握できないくらいの数ある
 - ・年貢の収納状況に関して…市町村単位でも数多くの資料が残っていて、江戸時代の村の年貢の収納状況が年次を追って分かる
 - ・地域の産業に関して…特産物や伝統的な産業も含めて

- ・道に関して…河川交通、陸上交通、鉄道交通等々、旅日記も参考になる
 - ・地域の文化に関して…俳句や短歌が神社などに残っている、新聞等に投稿され記事として残っている場合もある
 - ・戦争体験に関して…空襲などの戦争体験者の聞き取り、聞き取りは今しかできない。テープなどで記録している場合もある
 - ・戦没者に関して…お墓の調査、戦没者名簿、戦没地、戦没年代
 - ・選挙に関して…国会議員の選挙、地方議員の選挙について
 - ・市町村議会に関して…議事録、地方行政の流れを振り返る
 - ・地域の特徴ある地形に関して…断層、扇状地、河岸段丘、三角州
 - ・地域の産物に関して…農作物、特産物
 - ・地域の気候に関して…気温、降水量
 - ・災害に関して…地震、風水害、干害、火災
 - ・地域の資源に関して…鉱産資源、天然資源
 - ・他教科との関連から…地域の音楽（盆踊り、秋祭り、祝い歌、作業歌など）理科（昆虫、植物、化石）等々
- 教材化できる材料は限りなくある。

小学校の目標は、「資料などを活用して調べ、歴史を学ぶ意味を考えるようにするとともに、自分たちの生活の歴史的背景、我が国の歴史や先人の働きについて理解と関心を深める…」¹³⁾である。中学校では「身近な地域の歴史や具体的事象の学習を通して、歴史に対する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断する…」¹⁴⁾である。高等学校では「資料に基づいて歴史が叙述されていることなど歴史を考察する基本的な方法を理解させ、歴史への関心を高めるとともに、文化財保護の重要性に気付かせる」¹⁵⁾とある。「内容の取扱い」では、「資料を活用して歴史を考察したりその結果を表現したりする技能を段階的にたかめていくこと。様々な資料の特性に着目させ複数の資料の活用を図って、資料に対する批判的な見方を養うとともに、因果関係を考察させたり解釈の多様性に気付かせたりする…」¹⁶⁾としている。資料活用では、「資料から必要な情報を読みとる」「資料に著されている事柄の全体的な傾向をとらえる」「複数の資料を関連付けて読み取る」「資料の特徴に応じて読み取る」「必要な資料を収集・選択したり吟味したりする」「資料を整理したり再構成したりする」¹⁷⁾とハイレベルのことを要求している。

また、博物館、郷土資料館などの施設を活用すること、そして学芸員や地域の人々の協力を得ることも考慮すると内容も充実する。

5 近世の地域史と歴史教育

具体的な事例として、江戸時代の村方騒動を取り上げる。

村方騒動は、村の中で村役人などの有力者と一般の百姓との間で起こった騒動である。その内容は、村役人の特権（世襲）をめぐって、年貢、村入用の勘定をめぐって、村政の運営をめぐって、入会地の不正利用、家格やその標識をめぐって等々の争いである。一般の百姓の要求内容は、村入用の軽減や村役人の罷免要求、さらには諸帳簿の開示請求、年貢の割付を公平にするようにとか村政の民主化等々を求めたものである。江戸時代の村方騒動は村の中で起こった争いであるから村の数だけあったといわれるくらいに数多くあった。したがって、地域史としてはごくありふれた出来事であり、取り上げようと思えば内容には違いがあるもののどの地域でも取り上

げることが可能である。例えばこんな史料が残っている。

すみくちいさつ のこと
 済口一札之事 裏書 ひかへ

一 近年、割方等二間違茂有之由二而、村方不相治候 二付、去暮、大庄屋様へ、当村年寄助五郎并 百姓之内定八参り委細申上 候 処、大庄屋様被仰 候 へ、御勘定先之儀二候得者、来春迄相延可申与

おおされそうろう は かんじょうさきの ぎ にそうら え ば まであいのばしもうすべしと
 おおされそうろう につき えんいんまりありそうろう しかる ところ
 被仰 候 二付、延引罷有候、然ル 処、釜嶋村利兵衛殿・鍛冶村九郎
 右衛門殿・同利右衛門殿右三人黒石村へ被参、内分二而相済 候 様
 とりはかりしかるべしと よりおおされそうろう につき
 取斗可然与、大庄屋様方被仰 候 二付、十九日二市原村吉右衛門殿
 宅へ御出被下、黒石村村役人中御志らべ之上、小前百姓不残御志ら
 べくだされ おあらためなされそうろう ところ まちのう ころある や につき
 べ被下、諸帳面等御改被成 候 処、間違等も有之哉二付、当六月二、
 六拾弍御立戻シ被下、夫食其外割方等之儀ハ、右御三人より御貫
 なされそうろうよし いちどうなんの もうしぶん ことずみつかまつりそうろう こう こと ていねい に くだされそうらは
 被成 候 由、一同承知事済 仕 候、向後、諸事丁寧二御勤被下候ハ
 ば、村一同何之申分無御座候、為後日済口一札仍而如件

文化二年丑正月

百姓 善右衛門
 平吉
 (中略)
 定右衛門
 儀右衛門
 組頭 又兵衛
 同断 六右衛門
 同断 市右衛門
 〆

釜嶋村 利兵衛殿
 鍛冶村 九郎右衛門殿
 同村 利右衛門殿

まえがき の とおり
 前書之通、釜嶋村利兵衛殿・鍛冶村九郎右衛門殿・同村利右衛門
 殿御挨拶二而、事済 仕 候 処、相違無御座候、以上、

庄屋 十蔵
 年寄 助五郎
 (黒石村・岡田哲夫所蔵文書)

これは、村の年寄助五郎と小前百姓の定七らが庄屋の年貢の割り方に間違いがあるのではと不信に思い大庄屋のもとに訴え出て、諸帳面等の改めを求めたものである。その結果、帳面に間違いが発覚し村の中が治まらなくなった。そこで他村の者が入って、村役人や村の者が取り調べられ、帳面なども調べられた。そして、間違い分を庄屋が弁償した。そうして両者が納得し済ませたというものである。これは、年貢の取り立ての諸帳面についての監査請求にあたるものである。封建的な江戸時代にこうした監査請求の権限が一般の百姓たちにもあったということを示す史料である。この資料は文化2(1805)年の段階の民主化の状態を示している。今風に言うと、

自治会の会計についての自治会員から監査請求がなされたということである。封建的な社会下の当時に、捉え方によっては民主的な権限が百姓に認められていたということである。また、大庄屋や第三者である他村のものが仲介に入り取り繕っているということも解決の方法として特筆される。封建的な世の中で、民主的な気運が地域の中で部分ではあるにしろ底流で蠢いているということである。地域での一つ一つの小さな動きが重なって歴史を大きく動かしていることを示すものである。歴史の根底の部分で民主化が成長、発展しているということの表れである。また、歴史の主体を考えていくうえでも、地域の百姓たちのこうした動きが歴史の発展につながっているということの意味する。そうしたことからしてもこうした動きは重要である。地域の人々が歴史の主体になっているということの表れである。村方騒動で地域の人が意思表示をしているということである。こうした教材で地域の一人一人が主体となった民主主義を考えるということである。そのために地域史で学ぶ歴史教育として

このような村方騒動の諸帳面の開示請求といった封建制下での民主的な要素を探り出していくことは大事なことと考える。歴史教育でこうした地域の中の民主的な要素を取り上げていくことは意味があると考える。地域に具体的にあることを取り上げていくことでより身近なものになっていくと同時に主体的にもなっていくと考える。自分たちの地域の先人の動きである。歴史を今日的に意義あるものとするができることと考える。今日の主権者教育にもつながると考える。

さらに、その他の村方騒動の事例などを加えることによって内容を発展、深化させることも可能となる。

例えば、村方騒動の結果、村役人の罷免を要求する場合がある。他村の事例である。

組内相談申定之事¹⁸⁾

一 庄屋理兵衛殿、去亥年村方御上納銀引込二相成、右二付、御役所より御答被為仰付候上、同人所持之家財不残売払、早々御上納可 仕旨被為仰付、則、当月十一日より売払代銀を以、御上納被成下候趣承知仕候、然ル 処、右体無身体之理兵衛殿役儀向後小前一同不承知二御座 候 間、其段御上様江御断被下度奉願上候、右二付、入用等相掛り候其違背中間敷候、其段無心配御申立可被下候、依之小前連判差出し申候、以上、

嘉作 印
 三郎右衛門 印
 (以下一七名連判)

組頭
 清七殿

(山野里村・西川所蔵文書)

この史料は、村の者たち十九名が組内で話し合い組頭の清七に村役人(ここでは庄屋)の罷免を願い出たものである。ここで出されたものと同様のものが他の組でも作られそれぞれの組頭に出され

た。最終的には村内十の組の内八組のものが一団となって庄屋の罷免を要求した。罷免要求の理由は上納銀を取り込んでいたということである。この史料は、今日の直接請求権にあたりコールに相当する。封建的な江戸時代に直接請求権にあたる解職請求権があり、実際に村役人の罷免要求がなされていたということである。こうした事例は多くあったことが確認されている。

先の監査請求、この解職請求といい直接請求権がある面で機能していたということである。

さらにまだある。村役人の罷免で新たに村役人を選ぶ場合にどう選ばれるかである。村役人を選ぶ場合に封建的な格式を重視する世襲制が主であるが公選制があったという事実もある。入れ札という選挙で村役人を選んでいく村もある。世襲制か公選制かで、村役人の選定について民主的な面を発展的に捉えることができる。入れ札という選挙で村役人を選ぶようになると、入れ札の資格がどうなっていたかなどを考えあわせて、封建制下での選挙制度の発展過程をも見ることができる。

その上に、村での年貢の割り方を具体的に見ることで税制の民主的な在り方まで考えることができる。すなわち、江戸時代は、税が村に賦課される。村請制である。村にかかってきた税を村役人が村人に公平に割り振りする。村人の持高に応じて年貢を割り振りする。年貢の徴収も村役人が担当する。そうした中で、家別に割り振りするのか、持高に応じて割り振りするのかで不公平感が出てくる。そうした税制面での民主的な在り方の変化や民主的な成長過程を学習することはこれも主権者教育に役立つと同時にこれから民主的な国家や社会を形成していくうえでも大事な学習機会となる¹⁹⁾。

こうした発想で地域史を取り入れた歴史教育に携わっていくことが重要と考える。

近世の教育・学問に関しても、時期は一定していないが各地域に藩校、塾、寺子屋があった。そこでの教育内容や教育制度についても、各地域の独特のものがあつた。これも地域史を歴史教育に活用できる。学問の内容も朱子学から陽明学、古学、国学、洋学等々ある。諸学問の発展と民衆の意識の動向は注目される。今日の思想意識のもととなっていることからしても、思想意識の形成過程を考えていくうえで大事である。

地域には中央の学者の弟子たちがいる。その弟子や関係の人々によって考えが広められていた。その封建的な思想の中にも民主的な面があることに気付く。例えば、武士道の精神という封建的な考えを象徴するものである。その中にもより民主的な考えもある。各藩の藩士たちはこの精神を生きる支柱としていた。その考えや生活の中には封建的な考えというよりも民主的なところがある。武士道の支柱である「義」では「打算や損得のない人としての正しい行い」をいっているし、「誠」では「言ったことを成す」から「武士に二言はない」となり、言行一致の行動となる。不正を許さない正義漢、筋をまげない信念、責任感の強さ、礼儀正しさ、フェア・プレイの精神、不正や卑劣な行動を自ら禁じること、弱い人の味方など民主主義をも支える支柱でもある。民主主義の基盤となるものでもある²⁰⁾。こうした思想の展開から成長発展するところを地域に生きた人たちから考えていくことも大事である。

ここでは一例を挙げただけではあるが、地域史のなかには近世史に関するすべての分野が揃っている。しかも近世の地域資料は豊富

にある。ふんだんに活用できるだけのものが地域には存在する。

県史、市町村史を編纂する段階で蒐集した資料が数多くある。その一部が県史や市町村史に使われたに過ぎない。掲載されなかったものが莫大にある。蒐集されたもの以外にも埋もれた古文書などの地域史料もまだまだある。身近な史料をもとにした地域史を歴史教育で取り上げない手はないということである。

取り上げ方としては、地域資料が豊富にあるから何でもとり上げればいいというものではない。近世の場合、肝心なのは民主化という視点を念頭におくべきだと考える。「平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期」するためである。

6 近代の地域史と歴史教育

次に、近代の事例を挙げてみる。例えば、近代に入って自由民権運動が展開され民権思想が普及する。民権運動に関する動きは各地域に存在する。例えばこんな史料が残っている。

檄章

今や、我国欧米解明国ト対峙スルニ当テヤ、各自奮勉シテ智識ヲ開達シ権利ヲ弁ヘ、皇国ノ民タルニ背カサラシメ、以テ、叡旨ニ答ヘサルベケンヤ、維新以降処トシテ校舎ノ設アラザルナク、殆ト邑ニ不学ノ戸ナク、家ニ不学ノ人ナキニ至レリ、其進歩ノ速カ駿々乎トシテ驚クニ堪ヘタリト雖トモ、此ニ患フベク、又、慨スベキコトアリ、何ソヤ、曰、人民独立主義ノ氣力ニ乏シク、即チ民権ノ振ハサル是ナリ、其民権ヲ盛ニスルハ、演説会ヲ開クノ至便ナルニ在ルカ、目今、該会ノ設アラザルノ地ハ殆ント全国中指ヲ屈シテ数フ可キナリ、独リ吾播国ノ如キハ、姫路ニ就光社ノ有ルアルノミ、当地ノ如キハ、演舌会ノ何物タルヲ識知セサル者十中八、九ノ多ニ居ル、豈慨歎ニ堪ユベケンヤ、樸等考フルニ、盟友数員結合シテ、茲ニ一社ノ演説会ヲ開キ、各意見ノ倉庫ヲ穿チナハ、演者ハ智識ヲ確実ニシ、聴者ハ自己ノ意見ニ照シテ、其才ヲ進ム、是レ一挙兩全ノ策ナリ、左ニ列記スルノ諸君ハ、才学兼備ノ諸君ナルハ樸ノ信シテ疑ハサル所、深ク微志ヲ垂察アツテ同意ノ二字ヲ恩賜セハ、何ノ喜々ニ加ヘン哉、誠ヲ惶頓首、

明治十三年三月一日 發起人 田峰樸吉 印

上田宗兵衛君 同意可速発

和住無事也君 印(和住)

平野驥君 同意

田峯喜三君 同企望々

(貼紙) 開会希望スト雖トモ、本県下三原郡加利村戸長ヨリ演説会列席云々伺ニ、戸長ニシテ該会ニ例シ候儀ハ不相成ト之指令アリ、因テ我輩等ニ於テハ辞スルヨリ他ナシ、拝接万謝、印印印、

大西喜三郎君 印(大西)

井口久作君 同意(貼紙抹消) 印(井口)

中井城太郎君 同意可速発

三里辰三郎君 同意

三里銀治君 同上

高藤了退君 承諾

鎌尾万齡君 足下

至急御回送被下度、且周尾ヨリ御返却ヲ乞、

(たつの市 田峯弘一所蔵文書)

これは啓蒙思想を広めるための結社を呼び掛けたものである。「今や、わが国は欧米の文明国と張り合わなければならないときにあたって、各自が奮い立って勉強し、智識に目を開くことをもとめ、権利をわきまえて、自分たちが皇国の民であるということに背かないで、天子の意思に答えようではないか。明治維新以降校舎を設けなかったところはどこにもなく、全ての地域で校舎を設けた。したがって、村の中には不学の家がなく、家の中には不学の人がいないところまで到達した。その進歩の速さはすばやく驚くほどである。しかしながら、ここに心配し嘆くべきことが一つある。それは何かというと、人民が独立主義の気力に乏しいということである。すなわち、民権が振るわないのはこのためである。その民権を盛んにするには演説会を開くようにすることが簡単で効果がある。現在、演説会を開いたりする会を設置していないところは全国の中で指を折って数えるくらいである。そんな中で、我々の播磨の国の場合、姫路に「就光社」があるのみである。当地の場合、演説会がどんなものであるか、知っている人は少ない。十人中八、九人は知らない。どうしても心配し嘆かざるを得ないことである。株吉等が考えるに、盟友が一定の人数集まって会を結成し、ここに一結社の演説会を開いて、各自が持っている意見を明らかにすれば、演説をする者は自分の知識を確実に自分のものにすることができるし、演説を聞く人は自分の意見と比較して足りないところを学び進めることができる。結社を結成し、演説会を開くことは一挙兩得の策である。左に列記している諸氏は才能、学識を備えた人々であるということは株吉自身が信じて疑わないところである。この志を深く推察して同意してほしい。互いに結成に加わり喜びを共にしようではないか」

と呼び掛けている。一地域の置ける自由民権運動と位置づけることができる。

こうした結社の呼びかけは、自由と民権を求める運動の先駆けである。貼り紙には、運動には賛同であるが立場上規制があって運動に参加できないという当時の状況も知ることができる。この運動に同意しているのは戸長等である。当時、地域の指導的な立場にいた戸長等の政治意識があらわれている。こうした運動の広がりや発展過程を考えていくことによって、今日の民主主義の状況や今後のめざす方向性などを考える材料となると考える。「地域の、地域の人による、地域のための」活動である。地域ファーストである。

次に、明治にはいって地方自治制度が一新されて新しい行政機関が誕生する。府県が設置され、町村制もスタートする。そして選挙制度が整備されて府県議員が選ばれる。町村長も選ばれる。また、国会が開かれ国会議員も選挙される。当時、選挙権が認められるが制限選挙である。それぞれの地域の状況から国全体の選挙制度の変遷過程を見ることができる。より身近なところから歴史を見ることができる。また、その成長し発展する過程をつぶさにみることもできる。選挙権、被選挙権について、地域の状況からつかむことができる。直接国税を15円以上納める25歳以上の男子がどれくらいいたか選挙権の実態がつかめる。また選挙の実態もつかめる。地域によって状況が違う。場合によっては選挙結果の数値までわかる。当

時すでに新聞も発行されているので、あわせて新聞記事を資料として活用すると、選挙情勢までわかるし、主義主張まで把握でき、啓蒙思想の普及状況までわかる。

『大阪朝日新聞』明治27年1月18日付けによると、「明石の改進黨大演説（大失錯）」として次のような記事がある。

いよいよ 愈 十六日午前十時より夫の大西座に開きたり時節柄聴衆期に先だち陸続として詰掛け定刻に至りては場中已に立錐の地を余さざりしが嘗て触出せる東京下りの顔を見ず（此訳は前号に記せし如く当地より出発延引せしなり）兎角する中正午を過ぎ一時ともならんとする頃漸やく鹿島秀麿氏演壇に現はれ他の弁士は未だ着せざるも取敢ず開会すべしとて政党論との題にて長々演説するうち今回総選挙に就て起りし正義会と称する一団の壮士三十余名場隅に座を構へて囂々批評を試みて終に之を打消したり、次に演壇に攀上りしは肥塚龍氏の代理と称する福田常松氏なり、政府及自由党てふ演題の下に口を開くや攻撃的評言四辺に起り、自由万歳、改進黨撲滅の声槓を震し、弁士を閉口せしめたり、時に暑移りて三時となりしに、尚東京下りの弁士を見ず、熱心の傍聴者も腹は減る退屈はする一人減り二人去り終には一千余の人員余し得て僅に五十余名となりぬ、日已に没し時規七時を示す比ひ東下の弁士着到して第一番に尾崎行雄氏鹿島秀麿氏の紹介にて演壇に立ち立憲国民との演題を貼り出して將に舌を動さんと身構するや早くも正義会派の批評悪口紛々として起り鹿島は時間を詐りたり、弁士降壇せよ、早く引込め杯と絶叫して尾崎氏を降壇せしめたり、犬養毅氏の後を承け政治家の徳義との題に就て演べんとしたるも亦交ぜかえされ折角の大演説会故へなくドサクサの間に閉会したりとなル

選挙前の演説会の様子が具に報じられている。演説する側と聞く側の両方について書かれている。演説会があったことはよく報じられる。その中で聴衆の反応が注目される。その様子について、

つづ 続いて、一月二〇日、播州三木町光明寺の演説会で反対派のため嚮に明石の演説会を蹂躪されたる夫の改進黨東京下りの弁士尾崎行雄、犬養毅氏等が、予定のごとく、去る十七日午後一時より播州三木町光明寺の演説会に出席したるが、妨害者の為め不覚を取りたるぞ気の毒なる。今、其の概況を聞くに、第一席に現はれたる福田常松氏演壇に上り口を開かんとするや打消的拍手撲々として起り、場中争鬭を始むるものあり。聴衆総起となりて立ち騒ぎたれば、臨監の警部「解散」と一喝す。妨害者凱歌をあげて散せ

んとす。警部^{これ}之れを見て、「否、解散にあらず。余り騒ぐと解散を命ずと言ひしなり」と説明し、「^{さて}偕は、然か」と聴衆再び席に就きたるも、福田氏は其俣退席し、次に尾崎行雄氏「自由党と改進黨」と云ふ題にて凡二時間許長演説^{おおよそ}を為したり。此間も時々反対派の妨害を受けしが、^{さすが}流石改進黨の驍将、程ありて、更に頓着せず説きて、条約履行案の事に至り、警部の為中止を命ぜらる。次に、犬養氏登壇し、^{かたじけ}忝なくも天皇陛下より詔勅云々と述ぶるや聴衆亦又騒ぎ立ち、終に演説を了へずして止みたりと云へり。

(『大阪朝日新聞』 明治二七年一月二〇日)

明治二七年一月一六日の明石大西座であった改進黨の演説会での妨害の様子と廿日の三木町光明寺の演説会の様子を伝えている。明石の改進黨大演説での自由党系と改進黨系の人々の争いの様子が事細かに掲載されている。政党と立候補者、地域の活動家、有権者との関係、更には官憲の態度までがみえてくる。それぞれの人々の政治的な立場や考え方、さらにはその主体的な動きについてもより鮮明に見えてくる。地域に密着した資料をもとにした地域史を歴史学習に導入すると、より具体的な実態が見えてくる²¹⁾。

明治・大正期の新聞記事を資料として使うということは大いに可能である。特に中央紙の地方版、地方紙、ミニコミ誌等々数多く出版されている。地域に密着している。

さらに関連した資料を用いることも可能である。例えば当時のことに直接書き及んだ書簡があったりする。書簡は事の真実を直接語っている。史料的な価値が高い。書簡は歴史上の事実^はにちかいところがある、書いた人の性格面、その人の思想的なところまで読み取ることも可能である。ものの考え方の奥深さを読み解くことも可能である²²⁾。例えば前述の選挙に関連して次のような書簡がある。明治23 (1890) 年六月廿四日の差出のはがきである。

のふれ、^{げせつ}下拙昨日中島村へ参り承り候処、肥塚氏ハ一両日ノ内、御陳バ、^{おい}地ニ於テ演説被致候由、^{いたされそうろうよし}其際ニハ、^{そのさい}必ズ改進黨ハヤソ教ニアラズ候由、^は前後之席ニテモ一度者御述^いベ有之様御注意被下度、^{これあるよう}下拙世間の^{くだされたし}風聞^の仕^{ふうぶんつかまつり}候処、^{あり}本願寺派ヨリ何カ各寺へ押達し居候様子、^{ようす}然レバ、^{しか}農民一心物不知ハ、^{とかく}兎角、^やヤソヲキロウコト故、^{そのへん}其辺兄君ノ御弁ヲ^{もつて}以テ弁士諸君ニ注意^{こふ}乞フ

(たつの市 田峯弘一所蔵文書)

七月一日に第一回の衆議院議員選挙で、その直前のハガキである。その選挙に立候補している肥塚の演説があるという。その演説会の世話役の人に、改進黨はヤソ教でないということを弁士の誰かに言ってもらうように依頼したものである。世間の風評があること。農民は何も知らないでヤソ教を嫌っていることなどが書かれている。明治6 (1873) 年にキリスト教禁令が解かれるがその後の様子を書簡の内容は示している。同時に政党の選挙活動とも絡んでいたことがわかる。こうした資料を通して、選挙活動だけでなく、信教の自由や宗教の問題を民主化の視点から考えることができる。

書簡は内実を示しているので注意を要しながら活用すると、興味・関心を高めるだけでなく、歴史的な事象を多面的・多角的に考察し判断する能力を身に付けれるようになる。

近代の民衆史の視点からみると、最近あまり取り上げられなくなった米騒動や農民組合の組織化や小作争議、労働運動、都市住民運動などの社会運動がある²³⁾。どの地域にもあった事柄である。大正デモクラシー期の大衆運動もある。こうした地域資料も取り上げて教材化することも可能である。

おわりに

地域史と通史の関係について、中央の研究者・学者と地域の研究者の関係について、これまで対立的に見える部分がかったが新たな方向性が試みられている。「地域史の実証的研究の中から通史を逆照射し通史の内容をダイナミックにしていかなければならない」「地域の主体性こそが通史に影響を与え、国家を変容させ始める」²⁴⁾と、地域の視座から通史を組み立てていこうとしている。こうした視点を踏まえての地域史で学ぶ歴史教育である。また、研究者の問題においても、「歴史学研究には「中央」も「地方・地元」もなく、アカデミズムもアマチュアもなく、あるのは一つの歴史学にすぎない(中略) 歴史資料を調査し、これを細部にわたって研究し、その成果を叙述する点で、中央も地元も研究活動に質的な差異はない。(中略) 地域史研究は、まずもって、ふつうに暮らし誠実に生きる地域市民の共有物である。(中略) 地域史研究の成果を、当該の地域市民へ多様な方法で還元する努力を怠らずに続けるということがとりわけ重要である」²⁵⁾と、垣根はない。教育者も歴史研究者でなければならぬ。歴史研究の成果だけを取り入れるといのは余りにも受け身的である。資料の活用、考察、判断は学習指導要領でもいっている。教育者自らが主体的に地域史の学びを導入していくことが求められているということである。地域史を歴史教育に取り入れることによってより具体性を帯びてくる。その際、史料批判を充分に行う必要がある。そうしたときに、より政治的になるかもしれない。教育基本法に、政治教育について「良識ある公民として必要な政治的教養は、教育上尊重されなければならない」そして「法律に定める学校は、特定の政党を支持し、又はこれに反対するための政治教育その他政治的活動をしてはならない」とある。ここを現場では意識しすぎて避けているところがある。この部分に関してはある面で寛容でなければならぬように思う。政治教育はしなければならない。しかし偏ってはならない。余りにも中立でなければならぬことや偏向してはならないことが強調されすぎて、その結果、余計に政治的な教育から逃避している。社会科の現代的な課題からしても、積極的に取り組む必要があるのではないかと考える。今回は、民主化に主眼を置いた地域史に学ぶ歴史教育をみてきた。民主化の筋道や地域の人達の意思の表れも見えてきた。今後は、民主化の筋道や民意の反映の発展のかたちをより科学的にその時代その時代の要因を突き詰めていくとともに、平和、命、人権等に関する分野をも加えて地域史から学ぶ歴史教育を考えていく必要があるように考える。

註

1) 山本博文『歴史をつかむ技法』(新潮社 2013年)では歴史本

ブームで高校の教科書がよく読まれているという。社会人には受け入れられている。しかし、教育現場では違った反応のようであると指摘している。

2) 歴史学研究会『歴史を社会に活かす』(東京大学出版会 2017年)では歴史離れの現状から歴史学への向き合い方など現場からの提言がなされている。また、教科書の採択の問題も指摘されている。歴史教科書の採択の問題を現場の視点から教科書との向き合い方を大胆に述べている論稿(水村暁人「歴史教科書を学び捨てる」)もある。

3) 小国喜弘「歴史教育の改めての危機」(『歴史評論』No.791 2016年)では今日の教育改革を政治的な面から危機的状況としている。

4) 桃木至朗『わかる歴史面白い歴史役立つ歴史』(大阪大学出版会 2009年)では歴史学の危機的状況に挑戦しあらたな歴史学と歴史教育の再生を目指す方向で動いているとしている。

5) 地域概念について、狭い意味では近世の村を、広い意味では近世の村を数か村集めてできた明治の町村制下の村を考えている。近世・近代の行政単位であることを念頭に置いている。

秋田茂・桃木至朗『歴史学のフロンティア』(大阪大学出版会 2008年)では地域から歴史を問うという新たな研究の論点が提示されている。

すでに地域学習をとりいれた実践もある。間森誉司『小学校社会科地域学習 指導ハンドブック』(フォーラム・A 2012年)、『歴史の授業は子どもが主役』(歴史地理教育No.852)。『社会科70年これまでとこれから』(歴史地理教育No.867)には授業実践の記録が掲載されている。

6) 佐藤学「安倍政権の教育改革と政策の特徴」(『歴史評論』No.791 2016年)でいうような民主主義を解体させるような教育改革になると教育の危機的状況である。

7) ここに挙げた要素は、坂井豊貴『多数決を疑う』(岩波新書 2015年)、高橋源一郎『丘の上のバカ』(朝日新書 2016年)、岡田憲治『デモクラシーは仁義である』(角川新書 2016年)、森政稔『変貌する民主主義』(ちくま新書 2008年)、佐藤美由紀『ホセ・ムヒカの言葉』(双葉社 2015年)などを参考にまとめた。

8) 宮地正人『地域の視座から通史を撃て!』14頁(校倉書房 2016年)

9) 『小学校学習指導要領解説 社会編』70頁(文部科学省 2008年)。以下、『中学校学習指導要領解説』『高等学校学習指導要領解説』による。

10) 『小学校学習指導要領解説 社会編』101頁(文部科学省 2008年)。

11) 『小学校学習指導要領解説 社会編』101~102頁(文部科学省 2008年)。

12) 地域には本物の資料が多く残っている。取り扱う場合は写真にしたものや複写したものを扱うが、取り扱いについては文化財の保存の記録の面から十分に注意しなければならない。

13) 『小学校学習指導要領解説 社会編』73頁(文部科学省 2008年)

14) 『中学校学習指導要領解説 社会編』68頁(文部科学省 2008年)

15) 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』64頁(文部科学省 2010年)

16) 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』79頁(文部科学省 2010年)

17) 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』79、80頁(文部科学省 2010年)

18) 西川郁子所蔵文書。

19) 年貢の割付について、免状の最後の部分に「右無甲乙代官之前二而小百姓等迄寄合致割符十月中二皆済可仕者也」(田住家文書)とあったり、「御年貢皆済以前米穀他所江一切不可出候、且又、御年貢米金銀名主取立候節、忝人別ニ納之、米金銀員数月日共帳面ニ記し、納主之判形取置、請取手形ニハ名主令印形帳面ニ押切致し、納之度々相渡可申候、若、名主納人共ニ右之段不埒ニ致置後日ニ及出入候とも取上無之候、勿論、毎年御年貢割付皆済目録出候ハハバ、村中出作之者迄不殘寄合拜見致し、其段名主方江印形可取置候、兼而御年貢割之儀、甲乙無之様微細ニ末々之小百姓迄聊不疑様ニ可仕候、且又、御年貢割と村方夫錢小入用与混乱不致候様、可割合」(青山村文書)ようにある。年貢の割付を不平等がないよう村中の人が寄り合ってするようにしている。民主的な税の割り振りがされていたということである。こうした場合は江戸時代の始めからある。分野ごとに民主制の在り方や民主制の発達段階を整理する必要がある。

20) 新渡戸稲造『武士道』(岩波文庫 1938年)、笠谷和比古『武士道の精神史』(ちくま新書 2017年)、笠谷和比古『武士道』NTT出版 2014年)に詳しい。

21) 新聞記事などの場合、新聞記者の目を通して赤裸々に記述になっているので興味をさそう。史料批判をしないと偏っている場合があるので注意を要する。

22) 書簡で注意を要するのは、事件などで計略的なところから真実を操作する意図で歪曲している場合があるので慎重に読み取ることが求められる。

23) 民衆史の観点からまとめたものとして『日本民衆の歴史』全11巻 三省堂 1974~76年)がある。

24) 宮地正人『地域の視座から通史を撃て!』14頁(校倉書房 2016年)

25) 吉田伸之『地域史の方法と実践』154頁、155頁(校倉書房 2015年)

